

渋沢栄一の源流を訪ねてー 2

細田木材工業(株)

顧問 細田 安治

前号で渋沢栄一の生い立ちから資本主義の父と言われる経過を駆け足で述べました。今号では引き続き見聞したことをレポートします。

◇尾高惇忠の家

惇忠の家は、江戸時代後期、曾祖父の初代尾高磯五郎が建てたものだ。当時油屋と言う屋号の商家であった。農村地帯である手計地区に現存し、商家の趣を残す貴重な建物だ。一説によると磯五郎の妻は越後出身でこの家の建築に携わったのは、越後の大工と言われている。惇忠の生まれた頃には、米穀、菜種油などの日用品のほか藍玉の加工販売主とし、他に農業も営んでいたことも知られている。

渋沢栄一の年上の従兄であり、少年の頃から、栄一に学問を教え、栄一の師と仰がれていた深谷三偉人の一人であり、維新前の激動期、尊王攘夷の旗を上げ、同志を募り武器を集め、高崎城襲撃の密議を凝らすなどの急進派であった。現存する惇忠の家の土蔵の2階に兵器を隠し、密議を凝らした部屋などが残っている。このように惇忠の家は、いざと言うときに備えたこの地方での本拠地であった。

現在の家には6畳の和部屋が4部屋あるが、その真ん中に位置する樫の太い柱は大黒柱と考えられ2階の上部にまで達している。

◇煉瓦蔵

主屋の北側に煉瓦造りの蔵がある。昔の豪農の白壁造りの土蔵も立派だが、この煉瓦蔵は白壁土蔵に劣らず立派なものである。この煉瓦は「上敷煉瓦」の刻印のある日本煉瓦株式会社製の煉瓦を使い、総二階総煉瓦造りの何度も言うが立派なものである。

大正12年(1923)関東大震災で被害を被ったが、直ちに復元に着手し1年後に完成した。



尾高惇忠の家外観



案内看板



尾高惇忠邸の見事な総煉瓦造りの煉瓦蔵

◇何故ここで日本煉瓦

横道にそれるが、なぜここで「日本煉瓦」がでて来たのか。日本煉瓦とは、「一体なんだ」「多分由緒ある会社の煉瓦ではないか」と「木材や」で「物好きや」である筆者は早速調べると有名な煉瓦だと判明した。渋沢栄一の記念堂である「清風亭」や「誠之堂」にもこの煉瓦が使われており、ガイドによると、有名な煉瓦で深谷市の煉瓦史料館が作られるほど有名な会社である。一見の価値があるので機会があれば行ってみたいところだ。

◇煉瓦史料館 ホフマン窯

明治政府は欧米列強に対抗するため、明治19年(1886)日比谷周辺の煉瓦造りの官庁街建設計画により大量の煉瓦製造工場が必要となったが財政的に厳しく、ここで実業界の重鎮渋沢栄一に、大量生産可能な機械式の煉瓦製造工場建設を依頼した。栄一は自らの故郷深谷は

1. 煉瓦の原料である良質の土がとれることで昔から煉瓦生産が盛んである。
2. 東京方面への大量の煉瓦輸送は、深谷を流れる小山川、利根川から江戸川経由で水運を利用して有効である。二つの立地条件から深谷の上敷免村を推薦し決定した。

製造工場建設ドイツ人ホフマン考案の煉瓦焼成窯で、明治40年(1907)に建設され、昭和43年(1968)の操業停止まで、多くの煉瓦を焼いてきた。月産65万個の製造能力を持ち、東京駅や赤坂迎賓館(旧赤坂離宮)の赤レンガもここで造られた。

写真下のホフマン輪窯は明治40年(1907)建造、煉瓦の連続焼成が可能な輪窯で、長さ56.5m、幅20m、高さ3.3mの煉瓦造り。内部を18の部屋に分け、窯詰、予熱、焼成、冷却、窯出しの5工程を順次行いながら移動、およそ半月で窯を1周する作業である。生産能力は月産65万個、昭和43年(1968)まで約60年間にわたり煉瓦を焼き続けた。

平成18年(2006)煉瓦需要減少という時代の波に押され、約120年に及ぶ会社の歴史に幕が下ろされた。



ホフマン輪窯6号窯

◇中瀬河岸場

深谷市は利根川を渡れば群馬県に入る。渋沢、尾高家ほかの農家がお蚕、藍玉生産などで財を築いたこのあたりは、利根川と小山川にはさまれた湿地帯の為、洪水のたびに地面（土地）が流され米も作れぬ血洗い地域だが、商流では立地的に恵まれていた。

直ぐ北側の利根川に面して中瀬河岸場がある。中瀬河岸場は江戸時代、武蔵国と上野国を結ぶ利根川の船着場として栄えた。物資のほか、船客の乗り換え場であったため、人の往来も活発で、江戸の文化や経済の情報がいち早く伝わり、「情報発信地」としての役割を果たし、北武蔵の繁栄に大きな役割を担っていた。もともと、このような環境にあり、経済的・文化的に盛んであったことは、渋沢一族をはじめとする郷土の偉人らを生みだすきっかけとなったと言える。 続く



中瀬河岸場



深谷歴史の中心地図